

## 震災後の子どもたち(16)

# 自然・気づき

浅野みよこ

「自然・気づき」、これが私の働く保育園での九六年度の保育テーマである。地震の後、「自然との調和」についてこんなテーマを掲げるようになった。これまで「作る」「木」「土」等の順にテーマを進めてきたが、丁度「土」をテーマに選んだ時、そのしめくくりのように起こったのがあの大地震だった。今から思えばどこか

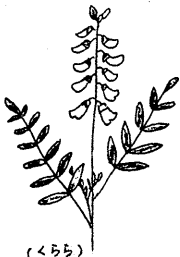
子感しながらテーマを進めていたような気がする。日々失われゆく自然の姿を目にしながら、このままではだめになるという思いにいつも駆られていた。

地震が起きた時、私はガタガタ揺れ動く家中に立ちすくみながら、とうとう来てしまったという思いでいっぱいだった。そして震災の惨

状をまのあたりにした時、もう引き返せない、本当に目を醒まさなければと自分に言いきかせていた。私一人ぐらいという甘えた気持ちで地球環境をだめにしてきた。沢山の犠牲者の姿に涙しながら私は改めて自分の生き方を問い直した。

私の家も保育園も大した被害はなかったが、地震の日を境に私の心は急転回を始めた。まず物への執着心がなくなった。形ある物全て壊れる。地震のあと残った物は巨大なゴミの山だった。私は家を整理しながらほとんどん物を捨てた。一番多かったのは本だ。愛読した本を捨てながら何と私は観念の世界を生きていたものかと思っただ。私が一番捨てなければいけなかったのは、観念に縛られた不自由な心だとこの時気づいた。物をどう見るかは心次第なのだ。私はある日奇妙な体験をした。はき古した靴下をゴ

ミ箱に捨てようとした時、悲しむような気がその靴下から伝わってきたのだ。こんな物にも心があると、思わず手をとめてしまった。結局その靴下は大きな穴があくまでく事となったが、物にも命がある事を感じ、物に執着しないとは物を粗末にする事とは違うのだと知った。人が心をこめて作った物には命が宿り、人が愛情をこめて大切に扱った物からは暖かい心が伝わってくる。そんな暖かい物で私たちの身の回りを作り直す事ができたら、私たちの社会は自然と調和するものに変わっていくのではないだ



(くらら)

カット・浅野みよこ

ろうか。

今まで見えなかった物が見えるようになる  
と、今度は自分の心が見え出しごまかせなく  
なってきた。ごまかすと私の心は痛みを訴え  
る。地震後しばらく、この心の動きに頭と体が  
ついていかず何ともアンバランスな状態が続い  
た。一番きびしかったのは夫との関係だ。これ  
まで家庭の平和のためにと問題を感じてもふれ  
ないようにしてきたが、それが出来なくなっ  
た。ごまかせないのだから日々やり合う事にな  
る。痛い問題にふれると彼は怒り、ギクシャク  
した関係がしばらく続いた。

夫婦の関係だけでなく、親との関係、職場で  
の人間関係など全てやり直さなければならな  
かった。そんな私を見て私の母は「あんたのよ  
うな考え方は特殊や」と言った。少し落着いた  
今から見ると、見苦しくもがいていたものだと

思うが、それまでの人間関係は本物ではなかつ  
たのだ。それをやり直すのは大へんなエネル  
ギーがいるが、そこを乗り越えた時、心はひと  
回り大きくなり楽になる事が分かった。

大工だった夫は、震災復興のボランティアの  
仕事で、壊れた家の修繕をするようになった。  
私の実家も彼に直してもらった。地震後すっか  
り元気をなくし、崩れた壁も目にとまらなかつ  
た母も、日が立つにつれ地震の怖さもうすれ、  
あそこもここもっときれいにと段々欲を出す  
ようになった。何をぜい沢な事を、神戸の被災  
地に行ってみたらいいと、夫は母のあれこれの  
要求に苛立った。母とやり合い夫をなだめなが  
らどうにか修繕は終わった。

「家を建て直すだけではだめやねえ。住む人の  
心も立て直さないと」と私たちは話し合ってい  
る。壊れた家は立て直す事が出来ても、人の心

を建て直すのは何とも難しい。私たちの大きな大きな課題である。

地震後のもう一つの変化は、二人ぐらしの我が家に、日本語学校に通う中国人女性が同居するようになった事だ。震災で住居を失った彼女は一年間我が家でくらす事になった。見も知らぬ外国人と一緒に生活するようになって、私の「家」に対する考え方は変わった。まずプライバシーなるものがなくなった。私の物を彼女は使い彼女の物を私は使い、生活を共有した。彼女の前でも私たち夫婦はやり合い、いつだったか彼がものすごく怒って彼女がびくくりした事がある。私たちに内緒事はなく何でもオープン。あるがままの姿で出会える場としての「家」をと私は考えている。

ありのままの状態で彼女を受け入れたので彼女も又、ありのままの自分を出してきた。彼女

も中国にいる夫との関係に悩んでいた。「あなたは幸せ？」と彼女は私によくきいてきた。

「日本人は幸せ。中国人、問題いっぱい。悩みいっぱい」とよくぐちをこぼした。日本に来て改めて自分の国を見直すと、今まで見えなかった問題が見えてきて余計苦しむ事になる。日本で様々な物を見て、彼女の考え方は変わり、中国にいる夫との間に益々ギャップができてしまった。「なぜ私が見も知らぬ日本人の家に世話になれるのか、中国の人に説明しても理解してもらえない」と言う。「だってそれは地震のためと説明できるでしょ」と私が言っても彼女



は首を振る。中国と日本の社会の違いを彼女は説明した。便利で物の豊かな日本にもう少しいたい。帰っても待ち受けているのはきびしい社会と、面倒な人間関係だけである。彼女は逃げたかった。帰国寸前まで中国に帰りたくないと言っただけを心配させた。

昨年の四月彼女は帰国した。その年の秋、私たち夫婦は招かれて四川省成都の彼女の家庭を訪れた。再会を喜ぶ彼女の隣に、私たちの訪問を喜ぶ彼女の夫の姿があった。彼女の夫はともやさしい人だった。「最初は日本にいる彼女が理解できず、寂しくつらかった。でも彼女を理解しようと努力し、日本の事も段々分かってきた」と彼は自分の気持ちを私に訴えた。彼は私たちが夫婦で来た事とても喜び、毎日私たちの為に料理を作ってくれた。私の夫は彼のそんなけなげな姿に心打たれたのか、日本に帰っ

てから前よりやさしくなった。彼女は自分の足もとを見ず遠くばかりを見ていた。でもそれは私も同じだ。まず自分の足もとから、まず夫婦の関係から世の中の幸せを築いていかなければ。

様々なもてなしの中で一番心に残ったのは、都江堰という二千年以上も前の巨大な水利施設の跡を案内された事だ。ゆったりと流れる大河の中に古代の人の偉大な事業の跡が残っていた。はてしない時間の流れと広大な自然の姿にのみ込まれそうになりながら、私は大きな仕事を成しとげた人々の姿を思い浮かべた。人間は決して小さい訳ではない。問題は心なのだ。心をどこにもっていかで何を成しとげるかが決まってくるのだ。広い大きな心をもたなければ。私たちは沢山のおみやげと沢山の学びをもらって日本に帰ってきた。地震がなければ彼女

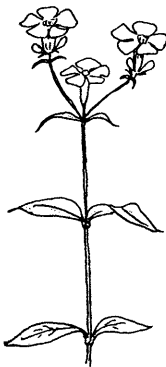
と出会う事もなかっただろう。地震はつらかったが、おかげで私は沢山の事に気づかせてもらった。

この原稿を書いているのは一月十六日。明日は震災記念日だ。今ラジオのニュースではロシアのタンカーの重油流出事故の話が流れている。油まみれの水鳥の話は悲しい。でも私たちは前を向いて生きていかなければいけない。こんな時代に子どもたちをどう育てていったらいいのだろう。

地震の後保育園では「自然との調和」をテーマにうたい、運動会では地震を表現あそびとして再現した。地震の場面で涙を流す親もいた。今また「自然・気づき」をテーマに、足もとの野草の命に目を向けている。今まで気づかなかった足もとに目をやると沢山の野草の花が咲いている。子どもたちは毎日新しい野草を見つ

け、押し花にしたり観察画をかいたり植物図鑑で調べたりした。こんな小さな花にも誰が名づけたのか一つ一つ名前があり、人間の命を助けてきたのだ。ケガに効く野草、下痢に効く野草、ガンに効く野草……どれも人間の食べ物にもなる。知らなかった。一つ一つが新しい発見であり改めて自然の力の偉大さと恵の深さを教えられる。

子どもたちは野草の花を絵にかきながら、自分たちが図鑑で調べた事を字にしなが、いつのまにか集中力と根気を身につけ、物を見る力



(ふじぞろせんろう)

を身につけていく。野草たちのおかげである。

「野草ってな、人間たちにふまれたりしてかわいそう。でもな、根っこから栄養とか吸って、がんばっている」と子どもたちは言う。よくそこに気づいたね。私は素直に子ども心に感動する。出来上がった部厚い野草図鑑を一枚一枚めくりながら、私はそこに子どもたちの心の跡を見る。ああ、野草から、自然から色んな事を学んだんだなあと思う。それは頭で得た知識ではない。心で自分の体を通して得た知識であり、きつと子どもたちの心の奥深くにしまい込まれるに違いない。それが子どもたちの心の土壌となりそこからきつといつか、新しい花の芽が育つにちがいない。そう信じて私は子どもたちを見ている。

地震から二年が過ぎた。様々な記憶は日々薄れていくが私の心はもう以前に後戻り出来ない

い。目の前にある一つ一つの物が常に私に問いかけてくる。お前は本当に気づいているのか、何によって人間は生かされているのか。一人の人間を生かす為にどれほどの物を自然は用意しているか。身の回りをよく見てごらん。あの震災のあとでもそうだった。ひび割れた畑の中から菜っばが芽を出していた。その芽がその時何と光って見えた事か。私は何と自然の恵みに感謝した事だろう。私は自分が生かされている事に感謝しながら、今もう一度生き直している。

(善法寺保育園)